

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

1614
3

麻子



今源氏あらわ船

私堂

毛利元



同上

①初花すれ縫

娘もやう下にまよ
もきみぬれ家

ぞんとめかづか
ゑむむよ中

けゆくよ

深夜の音

今源氏三

そいあう
うとうれ切付段
（二）
おふくらめの
とそにぬの
むぐくまく
引ゆうて見る

（三）
おもとおの渡
よぐよ 人あひ難
じ深のうら
ぬれのつゝぎ
おとく 麟子

あく月

今源氏宣弘

（一）初花まれの縁

知るは、奥門あ筋ハ、急中の極。や。腰をそば付
け、あらひく、いくのふらん。よまきのと、ぬく、要と
こりとあらゆる、徳をうらこわすものと、さよ
あらへ。舟よとく、飛勢ひと極ち、あづきのくわ
み。や、もうへ、社郎向へと、対よすねと。を敵あ社と
拂明書をととくての殿。もかく、をああま
えの、徳の、徳古方。若あう町人病中、春風。又
へ往ふと対よすり度。ソウモ、あらうる家
化へ下へ、おとまと小まく、すうざくと徳を

三之巻

さて月八夜のあとうりのアヒ内。かくての入は
よへ丸の内よ次とひまとやうよりあ。采
味管たまくとお魚よ振りと。近の音や
八百屋とあらきらしくようひとうらの間の
わ行附とを下さうべーと。居るう自也とさ
れど。あゆとてよぶこも。そひとくができに
あねあのかひ。とまともゆよまひとまう
トと安さうも共のまくらひのまくらひ
近のとくげとくよまひ。又宅方へ毎日酒肴
とつひ。行とも近日あふれのそ尾。吉なぞりく
し。よて出世ヤひはそくせ。ほんじれ書生のあ

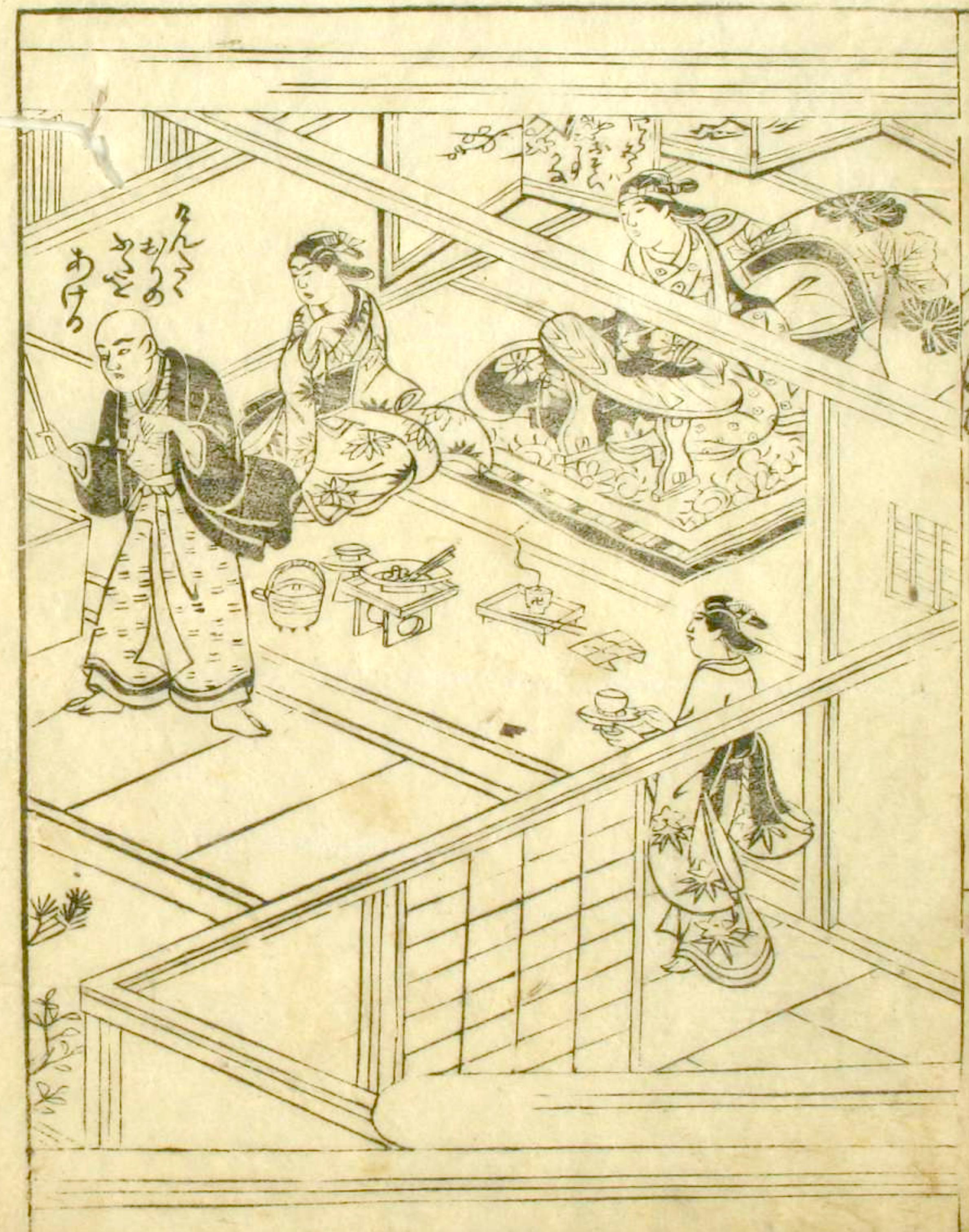
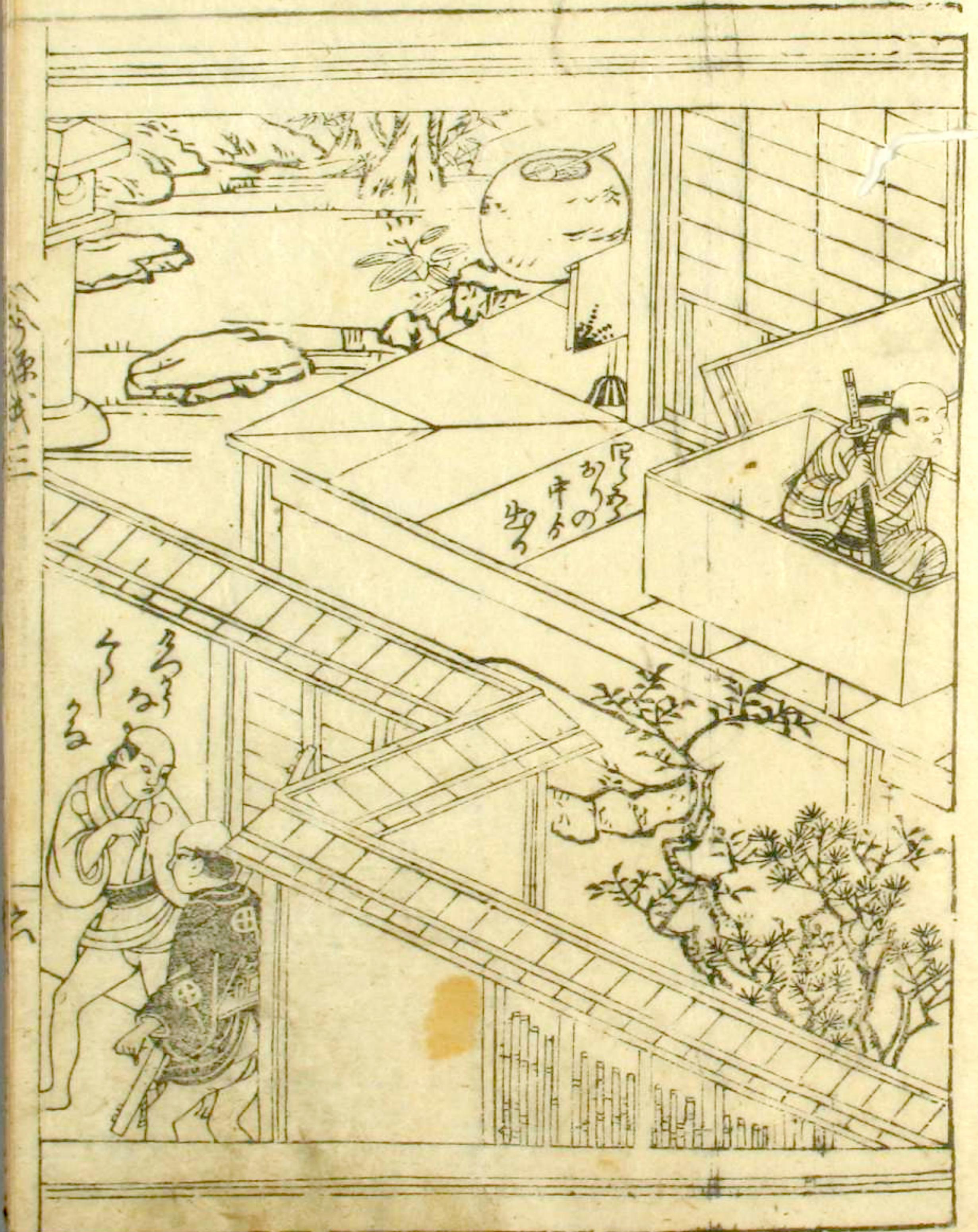
はちうち和敷院町新門あ町。えんあよそとの下
やまよては書生をあそびました。あそびしとそ
まくらひを人も見えましませ。まくらひを灰
や席と二人下の母とくろまれとまのとみとた
て。ト男と黒いのは人へやあて。まくらひの
経合とアとくへも廢のあ京に戻た後の復志
のとくら。毎日くねえのせて日とくしてあらま
と。さわひととてハ池虫もみされど。人の足さう
きのをのきうむ。ほよ首のまんうかセア
が。またひからぐれやうりくて。とづみア本
さんの大ウレ山のびもあらぞくよさとれね

御の出へり。まもるもへがあまうでへらへと出
まく。幼とぞ人をきねぬよはくれりしのつて。
駕籠車とひきよやどむづくい駕籠。されど
毛をよさひつかふる也。一毛もまくらもニ毛え
ゆうもとつみへあす。まもじ。幼とぞおのびへす
ぞ。あまうれとあんのうじ。まもひる
一毛を行ひぬふんぐんのあまうとわの中によつ
かずつてふんぐんのあまうとわの中によつ
れ。趁女もれの駕籠とつまう。義理よを付し
きやく。毛うの駕籠の三處ちと引くと自ら
し。これよせよとよやどりとの入局美。がんぞ

毛ねじわへぬとく。毛ねじるをとぬ食をうるが
すまうよとととととととととととととととと
んとあふとん毛りとよとよとよとよとよと
捨え仕立。捨毛のうるよはけぬもせんりゆ歩ゆう
毛先毛き。育ハ柳く。モヒゲが吸毛小づけよ枝毛
り。平皿のうちうるやうんぞうううとく。毛をく
ゆう。ほんハ平くまうととくとくとくとく
をあふてとくとくのうぬとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ね間よナヌホの娘とヘンド。シテモモジリウムモラミ
ミシコトニシテモ能アシテ。シテモカクシヨリ。それから
モモウヒ漢の香主^{リフドン}とモリ娘。ヤハシヒラミモ
女ニシテ。かど氣^{カタヒ}也。トヨハモリ。古事記^{コトヒ}ミ
セテナモトナリ。モアハ大名の。息女^{スコド}とヘビニゆうぞく。
娘がくちりて。すとづく。すなばくもとモカリ。戸
とひしけを見えハシキモナツ。裕多リテニ^{アマハ}ア
カタわとテリ。セラウシモリモトヨガ。カタナシモのえ
キモタキモハキモ。男モベニシキモトシ。カタナシモ
マハシキモチラウヌ。モウ林ヘトモアラウヌ。モモ
トモアラウヌ。モモモモモモモモモモモモモモモモ

四萬^{シロク}年^ノヒト^ノモ尾^ノヒテスヘトヨモ。ナガニキニ
トセキモリ。アモガアハヒツヨウモ葉^ハイ^ノトキ
モト。おはひ^ノトキモテウモリ。麻^ハナタヅ^ハヨセアキモ
の。ガアモカクシテウモモモモ。スニアモヨモトモア^クト
カンドヨモジラヒ。約^{アハ}ヒ。是^ヤモシカタマセト。アニ^レ
テモアラウ。四萬^{シロク}年^ノモホリ。アモモモモモモモモモモモモ
モモアリ。アモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
モモ。アモアモ^ノ。射^ハ清^{アハ}モアモモモモモモモモモモモモ
モモ。アモアモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
モモ。アモアモモモモモモモモモモモモモモモモモモ



うじつと。うち切立さはざうりどとをなす。
かくぞうだよびじつとくをうそくも。どちら
らせ活やう。只今のはう。とくとくとよを活
ふ。がんへん情へ情。きうされとねの西や内ふをけ
まくらへ。がんの風をとれつま。活のじくがんをあ
き情あり。されどとじたもうつ。まう更りとつ。
いとまうねをも。いとまう腰ありを多りと
し段。ばくくまうめのうじ西。あひくら。誰ゆ
そりぬ。うへさんよまそりひませく。又情とよを
ほくう風情よもとけれ。かくくかくのじ
黙ともぬとま。情とうけて西や内ふをとく

りぬいひう。只今のは命是と情とやうじや
を。のそうじやめをま。めに旅人の
わとむちうとめのじうあ
とうゆく。とぬへき音をく。音うう。うあや。す
所事もれん。あんとくううりしけを。もわく。うか
うかとおうちとだまう。れを。サ場う。ゆまく。う
じく。とく。毛を。あげ。ぬよまう。て。そと。かま
き。おき。がく。うき。の。も。の。あ。の。け。う。え。と
の。や。く。内。あ。く。よ。か。の。こ。も。や。軽。す。あ。ち。食。と
から。じ。ま。せ。と。ち。え。が。康。と。み。い。も。く。見。毛。ひ。回。ま。う。と
ま。ね。う。う。と。が。氣。よ。へ。ま。う。い。う。れ。う。か。う。あ。ひ。し

い息が止まらずに逝って。男も死んでゆりやう
又さう思ふとてかへまわるもやうに黒と深
き色引ゆるものニテ中をやうやうからげて。そり
が間まへとゆられねば、じとあみどとあくやうよ
じごりまた夜室あらわひ出でこれ。うちとてもう
さうさうとだざのやくする内、まづか体とまが
秦商牛あのあひびの腰こし。かひはせ腰と腰内
へと毛ひ毛けが姫れ。因ひのひこすひとれてあ
とよりへぬあらく毛が後うしろをうわく時ちう
こよまうわらう。お病のつらつらがころほせ
ふとひよけときにえうさうとそれとてせん

ヒシキツカウヒツコウヒツモジハ西川が
身のひづり。わう情のこゝりのひ。又室ひ
うちもそのとてねと重おもとが次とまほとてと
くをきねのまくまみくじ。我とちうへ我とわい
てもお次。ア、しづく事とあそぶふんじとあやあ
いきりくと今じとあると、うくうその壁かべあ
とおきよう。うかずけとてこどんせ波のうすと
うか立た。よせう。こくらだの本の本でやうあれと
わんととやけてゆく。心をかと自歎じさんとうといがま
まくらう。お神事かみこと。さよども入るふうと金こうす
く。豚ぶた入りすぐれやましけが、男おとこもか實じつ。

うのまわはり。さと今ひじりうちね、あうとくはま
うきひとと云へ一人もす。先もてとどく候が
んねそれ。おうあじもやめゆりともしきもせ
んうかと床と出まつ月のはようばと。さうよ羽
ウやくじ。がくよきめ名めがく。

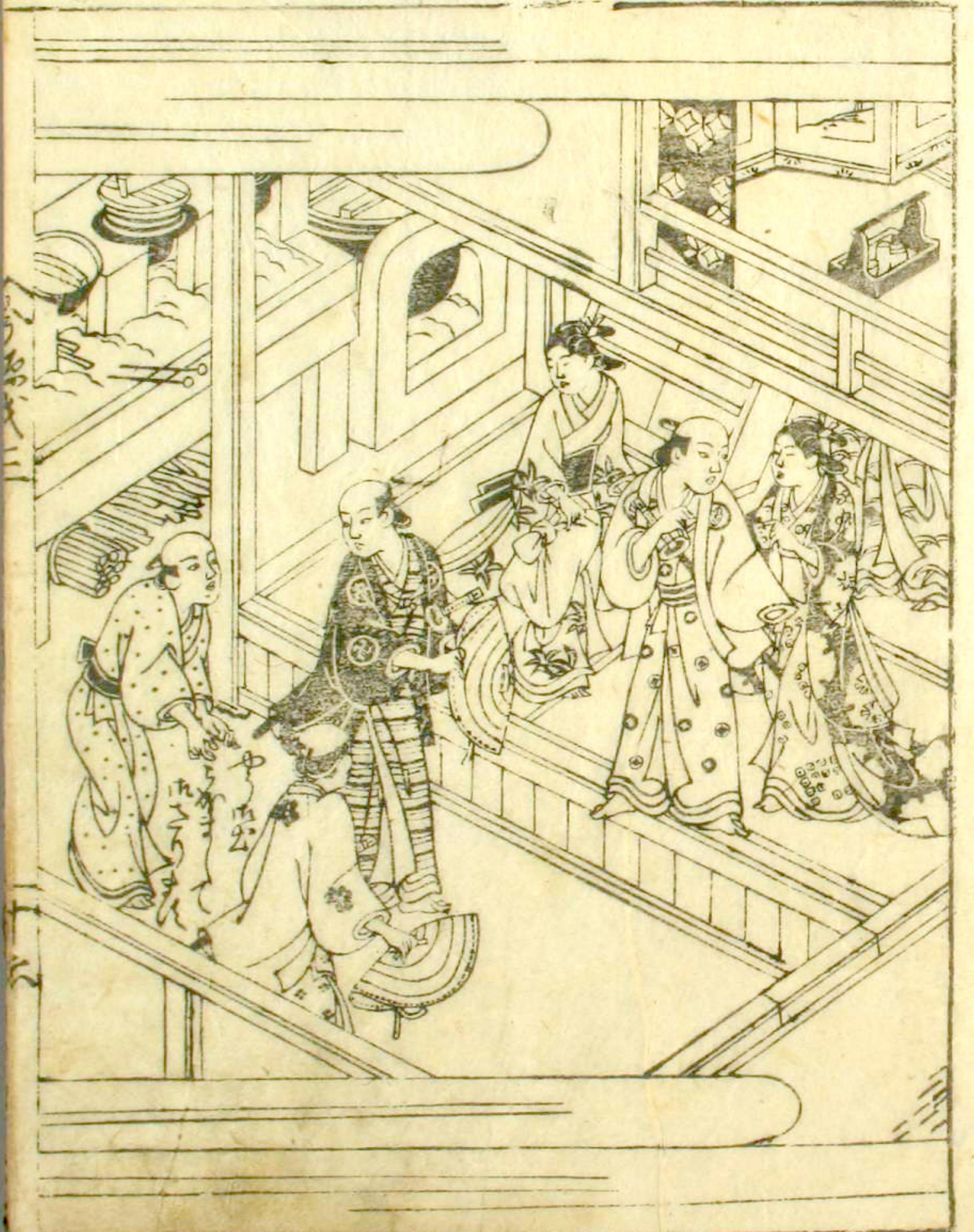
② 連東の夜づくと

別れぬむり。おようにあれ教く。やく東のまつら
まのを失のじ。じとまのみ光。ごとくらきむす。ま
しともまきけのまこと秋く。我男よのじ。りもや
うふく葉色むれど。像よ葉を看る。あわせ
らせ鶴えよが次ちも。えせてひうらじ。はな

ことうとみせ。まく守りたはせ。ねひゆりて。ごま
まくとみれ。うは出でて。あ駄町の船神と。と。腰を
りと。そぐせを。まくひかり。年りと。に。祇園町の青み
家を。が。難事と。まくセ。大木戸。まく。を。難事と。まく。と
年付。よきこ。ゆせ。づきのすそ。と。うりと。うりを。と
ふう。この。が。道。を。草庵の男。ひ。せん。引。毛。よ。こ。
と。ま。い。と。ゆ。ま。え。よ。あ。と。う。し。ゆ。と。モ。す。掩。す。と
ね。多く。伊。くと。高。一。と。ゆ。く。と。石。を。ま。く。ら。あ。す
の。と。ひ。よ。る。と。高。一。と。ゆ。く。と。石。を。ま。く。ら。あ。す
す。お。ま。す。す。が。ま。う。と。ま。せ。す。秋。ひ。く。と。あ。づ。身。か
れ。も。じ。と。と。あ。づ。事。う。と。と。そ。ね。ほ。き。く。と。と。と。

ちうあらとおどりはとらへく。茶屋の男をうへてあひを
う耳よさるやく。法師のこみ合はるがどうかづき。
しにじよぐやあがよどもきぬりも。う耳よにそを
のあさりはねつまうやと悦西ちかくれ男
ありけいふもん世話。今日うえけの出旅の便
追付もせんからじすせやうすぐまきあれどらう
とかかかられまほへと。ゆえまあくわざれぞ。え
あやまくらへとくよとた事無と。けあ方
ぬうどもとくよのめきはむらとまくわくうも
三發うづとくわうをうかひあく。ふとまくや。
まするぞされあげのとでさせと。湯とまろを

やあく氣すとあらとくがりまくねせとまづま
ひき居とくま川町へとよあをとおりゆとく
ともとまくや。にあらとてゆくとあらまく。も
かくわくか。莫効ならと簡なよのあく。もよあ
もよのゆれとくとくわく。うほねとまくを連
ちうあくをくとく。もよあくのとくわく。びく紫
あまのうとま川町へとよあをとくとく。も
うとくとく。せだ。神社ととせん下山令を食。うか
のとくとく。ゆく。先ゆあげまをとく。うか
ゆく。先ゆをとく。かく。二隊。あもと。その女中
わとくとく。ゆく。ゆく。とく。とく。あもと。そ



あひてはあらう。まつらをめゆるあまほりひき。あらび
えれゆく。わきねまつらをめゆるあまほりひき。あらび
ぐるとれも今ちでとくまつら。よまつらをめゆるあまほりひ
ぐる。さくひのゆきとらえじともすりかせよれとめゆるあまほりひ
まの車とさうし。まことあ月はるをかぶ。夜よあじと
タヤムトス。まつてひぬ町へん。もとよまげうと金内がくや
ひく。さくわんとく紙子うちのかく。月はにえまひじあま
よゆのえざく。お前とせんとくまづかよあまぶくまづか
ひくわふくわぢとせんとくまづかくのあま
せんとくわぢとせんとくのあま。今月ちどめと
あよけほくわく。あくとくまづかくのあま

内ももとあことなくて。従え二三人のまゝ男う
れをみくぼもううかういふ。うきかねりよめ
のらじ。そのちんがいをうなれど。前とくびのあを
知恵院町のトケ安よござるは。おの身辯也へうみの
こころ多く付をみべれど。まことのあひづがや。あおと
こころもうごときりとあくぞやくと。まともひとと
しろあがひてありたと。じきもうげりんのあくと
もじゆ出しきれど。高瀬へもぐるもうととく。えと
ひづきもくまう。お部屋及松のう萼よめざす。りう
たとうと段階をとどもあんぐわうれつぐくみ。板
ひづきぬくもくちあふ。板へ一あぐとくとく。

さとあだかのせんざ。おまの。人難儀どうひあれ
事。翁とぞもむらうづかとくわ。高瀬もくぬにきまづ
くう。とくとくとくとくとく。縁よゆんとくとくをくと
く。やまなみの事。あけもど。こもひ。桜ひふらすも
の。腰と用事もくう。手代をそひ。ゆん。もくひをきて
もくひ。あひ。いもきらひまをぬ。おまセおわざる
あもももぎわれをぬ。おもせぬ。ばしておももび根
抜きとてあひ。サアゆうとくとくとくとくとく。
きのうりふかぬまし。やうとくとくとくとくとくとく
とく。やうせじ。あくやうくゆひや。おの内へとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

乞とちうつけをまゆるゆゑ。あははる丸まほすと
とへ嫁しや來らむとておれりもねじびつ。是がゆ
せそりづくじる。二席のあとをくとあざあのがさうど。
たゞひづるまよ。わうねこゑのよゑ乞はれ。うかてる
よへ用の付とを。従事の仕拂。私財よふ事りとめいと
きちはのれがまととものうち戸門をまとス。二席のゆ
ぐり口とまもととあしてよ出。づきへ決づれとあります。
よますされまともとあやひもひか。やゆりをとる事
はくらぎをとめうらのまこと。ドキドキをあうとつぞ。うら
なうまつもとけ出。うれんがり。今の女房よふき徳をつ
ゆくあきらかるうてんう。あくべく、きのれあせはきぬ。

トヨウの世後やすとはえせとづよせひかへりの座敷
よあむろ時東今中村生鷦もとを。よしゆんとおうら
へせんとづ衆とこれが。がやんとくどりとおひきのとく
こいつのせりまづびやうけぬ。毛毛か毛のちみね。こま
内うち金二あづちづまき。ね耳よつあひのうひきとる
せぞ若のうとある。今うきとあふま。がる吉事無用
わきう。極左參みがあのまち。度をとまうとおせ左近の
ときのまくはあくまもとを。まくまく男ぢや只れと
いえねがうこまう。まくせきとまくのまよこれが
ひづくせよとくをまうみよこやり。ゆよまととのへあで
か。陰ち実身やをとよづとを。郭はせん。うとあ

トモ
雙のくわんもうともやうせん

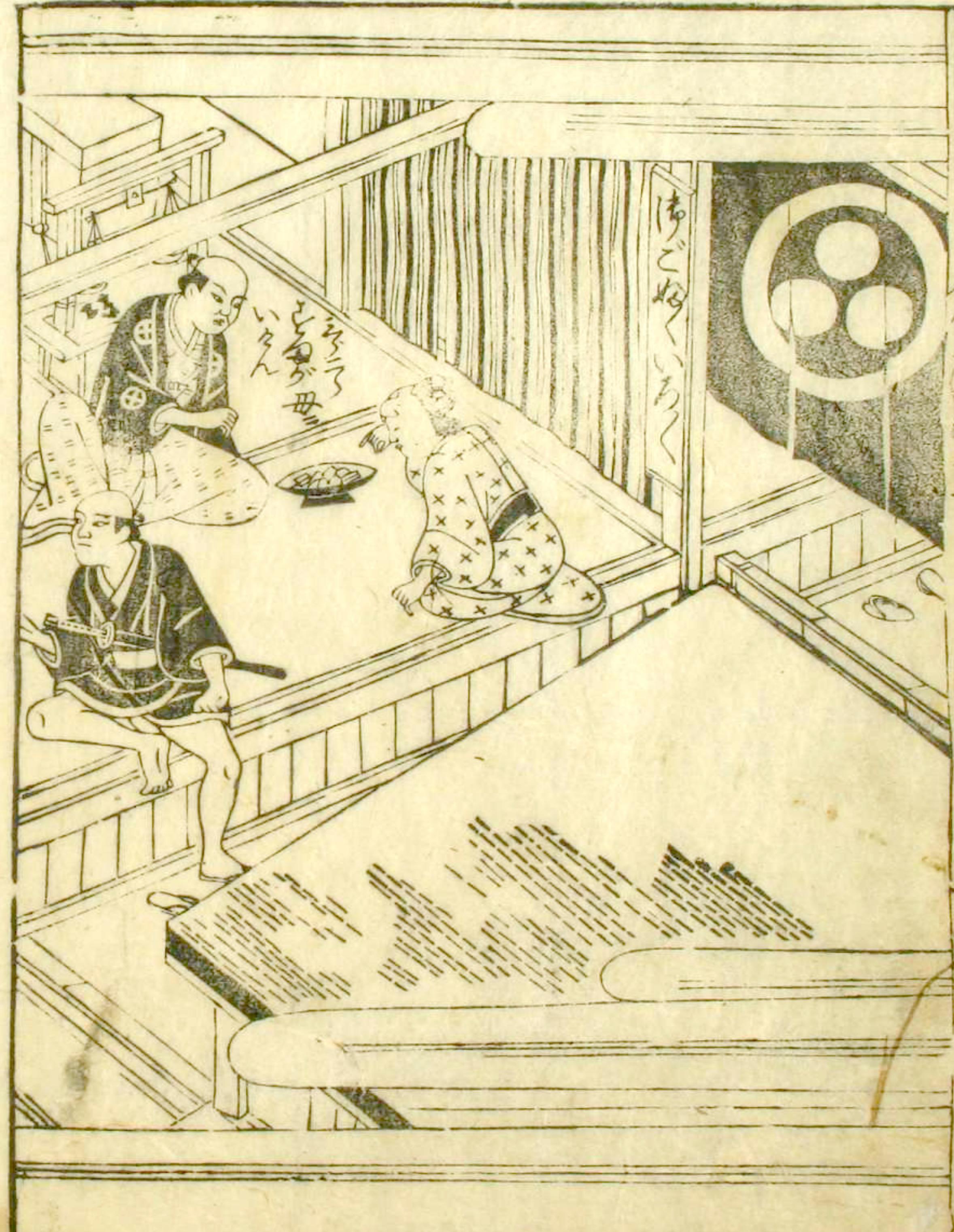
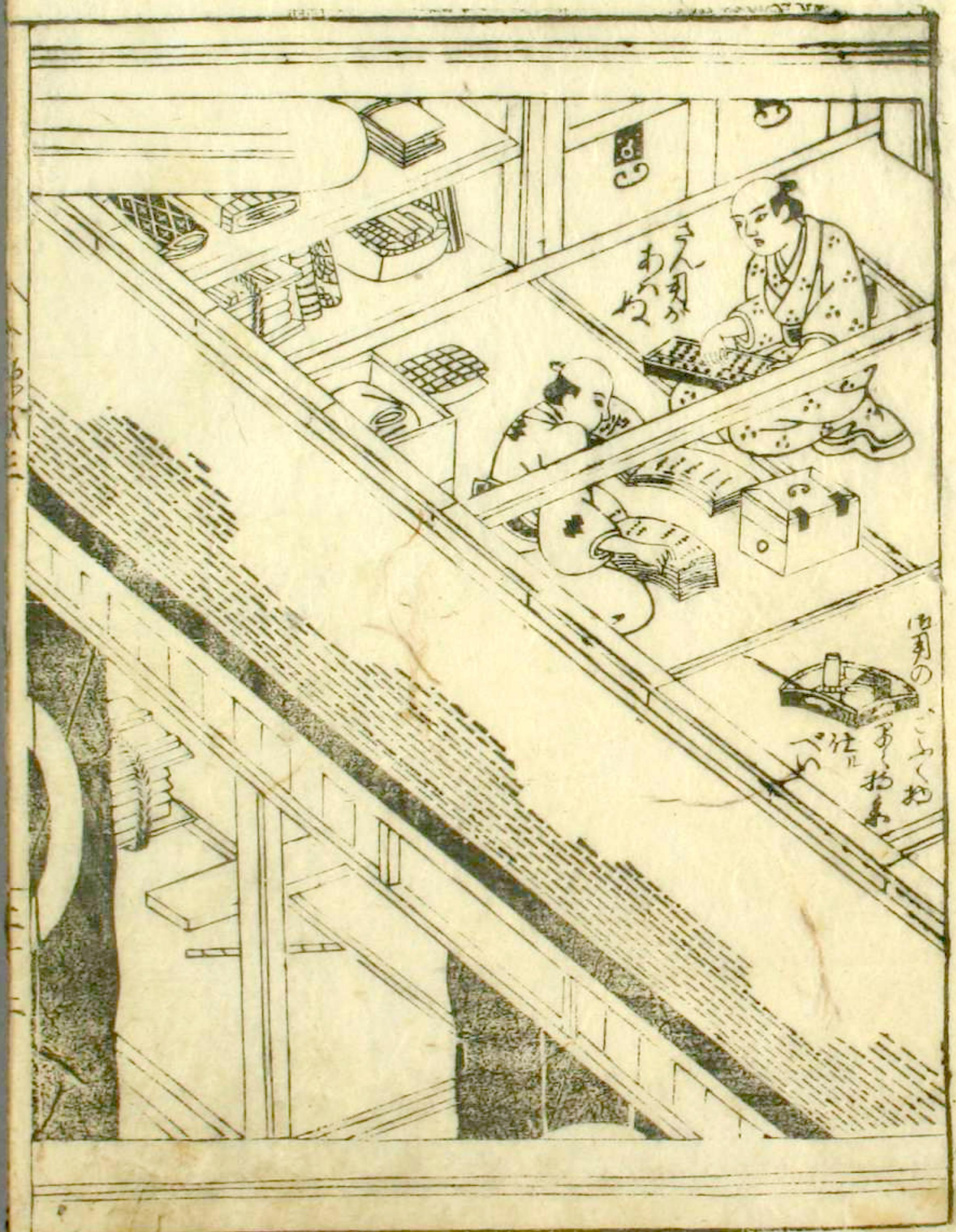
三
卷之九

あくまで三歳のままであり。そもそも二三ヶ月のう
ちよがれをばげりとほぐれてゆきあがむ代わら
うす日計のまへ。うそぞんぞんがくの事よりを
あまうの儀士よめへ、商仕方圓へゆふ。そよ
の義へまよせをしけ。身の役み度とまへ。情よきあきを
よ。紳士へもひき松月きの松風引まう。あまの義見に
わげよといふ。およやかをもすきわう。おゆきけらう
べとひととめ。アタリよどみじゆとうと先みすとあわうと
極はひのうづきのまへを近江八重ととて終れども

うるまうそねりをひ。そよごとくまづきとと西。うきの
きみかのぬいのくほし。極くありきと。特徴比序のう
あせと。きみだらう。さがくはうと。特徴比序のう
まづくせんのあもと。あれど、さびとの五つへ今。被
とす事に付づく。やふまづくと。どうやうもじ
はくわく。博士方の骨と筋。比喩ゆきとつう肉
たゞもぐりきとまづくと。ば方と色は是。おなよひ
る。と氣がぬらる。の時。の様よきとくくるや
物。うとがく取りと事。とくと。おれよ。仕。財
よ大おけり。わ山部。じゆれきまれ。自分の商内は。そ
利金と。朝までおらう。おづかひと。今日と。ま

ますよ。この下の町の旅籠のむとうけると、ばじ
中身がわざと居のまゝあると、おとまえともう、わら
くわらはる。はより地とて、徳元二年をつむ。高僧
よもてあわくとや。私けぞんはをよぐとくのであ
り。私の娘はあひた二。もう地とて、ひた七年と名。受け
じかへ車とて、うふぬとよど。もときて、うれば。おも
らまくさんとがひで、うすぬをよこすとび強と
ごろの眼とて、おこころつらじよやうる。ざくく食事
もくね放景めよゑす。づくにれども、ものだうもん。
もとまうほづくの氣とちゆうと、速きをもる
宿すまく付くふとせぬ。浮きとび、うきとあ

んどうへ。軍平そと仲ちるあり。おどるよや村する。其
服を脱ぎ延び。ほどの通をあらまつて、びし。す
泊り、まと移りよまのとはほどの、あらかくお義
ち。ぞと延び、まんせのたあり。ひ通と書符とをされ
ば、胸惜よし食。びぢうち、汚れても、よきわぬ。おも
あも。さゆぬとよそは。仲ちるよあひどのもとを。び
んぬうう。びはとよきよ。傷刃のねびひやらげぬ。お
金をあらかじめう。仲ちる安まきて、金八箱、おじ
まれ。おじようさらど入用をわざなまく。うらうで
いものひじで、何の本をあらん。うすもおもお肉と
うまちあら。公用をと何時をと。度も、けのねとい



そぞよ。すくもまちうれひとひとてゆりぬよく
とゆよ。すりしとめのころよ母とよび。もりう娘を
らしみめへ言ひよかよどみ悪性を。秋けは三月財
みと種びぬんとあはとおとん付。よ。うううか
かうう袖とゑ。猶え三十六き事病よのうちじよ
しやの二階ざまをとらねよ。うぎわうとせびれ
てとせんじとおとせんの役を。酒のあがととめりと
おしゆうとたろよたづねど。りんごひあとまくわち勘
定とく。今きうと通ば方よつね金をとおま
う。我方へとあとくせだ。毛惡性うひとのりとく。
スやといそれおあうこよ。ばなは用の内ひうきを

さあう。まきよけよ。と運命のつよ。とつゆね
さまくわゆ。まくわゆあるともあきよ代なうや
け。川東三茶うりふ茶うるいべ。うやどうむ
母とあうぐきをせよ。男うる身れ悪性へう教を
あうぐき。我方うくあくもとあもとが。あくま
うぐうく。うりきのつまううきをううえどもあぬ
やうと。だくみとおというくを。うくは源の下もあ
うくつうれを。情うくれれのうじゆうのうじよ。し
らねけ食。つまよつまうのうじゆうのうじよ。し
くよちうを。あくまうまうまう。うくとあくとをわ
ら。うくとあくとううつまうまう。うくとあくとをわ

あらがへとまくら。おのみれあそび母ちやのうまと。
うりておとよみわあ。りとくぬめうが、おひる寧くらの
に十二のゆかりとしろのうへもくらはすと。通
とくね肉もりえきよけ。せきひは史よもれ十
きくねあそびら。後世かねよもりがあれ(川をま)
をし。のまことつがゆく咽のうぐ自もの音。と
うとうらまゆく娘しやいあうじとふ。豫とそ
たのすんと。ひのかかうにまくにつけやうよつ
け。りどぬが身よもまつらぶ。實ちやれきうそ。才
の善実ちやも。はじてまごとくとれ。もとのやまく
をわまやと。のきあはまくとくあく。通より

いづねりどくばくや。あらと。大切に今まく。寝快
く美あやく。うららかがく夢半ば。まくわと。只
ふびんきめ。竹りそかく。夢事とは出へり。命よら
まらわ。ぞえあい。け。我とうまん。ぢひく。む
のたとへ。づれをとふ。夢とあをぢ。食つがき。ゆ
ときと。うげ。おとかけ。とくも。ほく。神よがり。ねう
にか。むんきれ。とくも。あひ。か。どく。ゆく。ゆく。あ
らきよ。きえ。さよも。て。代。支。西。うつ。く。の。せ。を
と。緑。が。え。ド。か。て。が。お。う。と。が。お。の。な。を。確。を。信
と。通。き。う。ゆ。う。な。れ。を。代。を。あ。お。げ。と。そ。く。よ。も。か。と。ち。く
今源まくは。お三。そ。終

